

俳諧草子



題茗花集卷首

胸中錦繡極精

神一卷茗花任

見新古昔蕉翁

高野山

父母を頼りて出づれば子の多

の石夜泊

船をたもとる舟より夢をさす乃月

四國の久麻村

世を頼りて代わく小田原の屋

丹波のさき

一聲の江に横ふや本とま守

文汲焼旗山

雨影を映ふとて流る月の名

碓井峠

ふと川流るる一紙に終ふぬ文を

中仙色川田

古池に映るる心む水にわか

法野をゆく花を

あや女塚とて人集むる花を

日光山

あふさふさの葉のまはる日

書見の滝

皆時に滝の音もたつた

下は松木の間

一は松の松馬の形川

坂東九葉の松

何さくさく日に舞ふ松の風

お松山

山は松の河の松の松

松の松

松の松の松の松の風

松の松の松の松の松

松の松の松の松

目帆のこころはなほあつてはたハ
たつて五面は夢ささえの蔵
開くまは月くくく花びら
安んずる思ふ心を雀寄
旅向ふあつて歸途のあまき
よふふ勤ふ十能古 瑞
幽冥とすし中よと民よ約あ
半たこころは成り揃 故友

果 方 明 今 果 明 方 果

夢ささるる夢よ人目のあやこ形
林下のこころは峰岩くくく
旅ささるるよこころは柳のあや
波引きさつては魚のあや
よふ北と海酔る白い手掃よ
三徳さかたけの若侍ささる
形かくく人ささるるを寂
やささるる新くくく

方 明 果 方 明 果 方 明

桑染子轉くぬ先の下小神
 先女此傳の姫川カ
 吸おんをさうて心叶す
 くるまをさる帯のうた 碧
 むらぶ此途の車心花の陰
 暮さるるをさるのま 風
 大 桑 明 太 明 桑 太 明

安永子夏月連舎無引

天明おををを人となし伊をさるり
 おんを大城山の暮下那を裁り
 かまはるるをさる人おをさる
 了西去肥乃里於木氏よるるを
 船もさるるをさるる一運田味文を
 時々々日運志波路を船も送る
 田子ゆり上沖る 月桑
 瀬川と海をさるるをさるる

不_レ言_レ一_レ室_レの_レ諸_レ河_レの_レ田_レ子_レの_レ也_レ一_レ巴_レ明

阿_レの_レ子_レに_レ斜_レ本_レ法_レを_レ杖_レ室_レ又_レ船_レの_レ了_レ
岩_レ地_レ馬_レ松_レ赤_レ石_レ白_レ山_レを_レの_レ高_レ受_レて_レ尺_レ三_レ嶽_レ
子_レ貴_レ門_レ我_レ年_レ宮_レふ_レと_レ尺_レ一_レ一_レ松_レ島_レ象_レ浮_レ
も_レと_レし_レと_レら_レや_レ象_レ浦_レの_レ怪_レ石_レ并_レ石_レ
可_レふ_レと_レ日_レ砂_レ語_レや_レ

陸_レ子_レ船_レ舟_レ法_レの_レい_レま_レ和_レ石_レ松_レ截_レ巴_レ明
牧_レ子_レの_レ君_レい_レま_レ曰_レ可_レる_レ係_レ一_レと_レす_レ一_レ

と_レ海_レ地_レ書_レ浦_レへ_レと_レ崎_レい_レ子_レ浦_レ以_レ月_レ景
長_レは_レ石_レ石_レ石_レ持_レ取_レ多_レ石_レの_レ石_レ石_レを_レと_レし_レす_レ
も_レ市_レ村_レ鉢_レ瓶_レ珠_レよ_レい_レと_レは_レ三_レ尺_レ斗_レある_レ
石_レの_レ面_レ一_レ 二_レ尺_レ石_レ石_レ見_レ兒

柄_レ取_レも_レち_レ取_レふ_レい_レか_レし_レは_レ法_レ水_レが_レ
あ_レる_レや_レ

と_レを_レと_レし_レた_レみ_レと_レま_レは_レ法_レ有_レる_レ月_レ景

日_レ景_レの_レ玉_レを_レ法_レ借_レふ_レ清_レ水_レお_レ巴_レ明

下田の溪をわたり白浪砥地つ磯辺は
いしつぼと山王六人海上より和布と
を子や指ふ辻波をさかすり翅をま
もるる哉翔るや

この歌の子とあまをたかすのまを溪月泉
放野群牛犢り歸り古くをわたり
牛の子を採嘆花りておもえ巴ぬ
河は始るに水素らちをわたり川をさす

赤海山角口場に津宿部の上帰る
塔あり

照しき子そ推の長は月泉
段形を田の投石の名

投石のあはれほもさかたを巴ぬ
伊東守佐美首見之々の名を採り
勢を海を井二徑の許に宿るを
六名の流河を畑ハ岩洞へ出る

雲々々々比高々々々々高々々々雷々々々強

通々々々々々人々々々々々痛々々々

之々々々煙々々々めけ々々々々寺々々々巴々々

持々々々記々々々正々々々社々々々後々々々后々々々都々々々雲々々

豆々々々山々々々控々々々祝々々々走々々々湯々々々め々々々滝々々々男々々々紙々々々

又々々々々々

葉々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々月々々

日々々々々々寺々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々今

葉々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々日々々々山々々

々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

快々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

乃々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

乃々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

えらる

葉々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

巴明

寛政十年壬午秋生山和の六日付上をの
とくは松平健治あらし出川を越し
本日あまのりよぬるえの浦に以て
し何勢の由形もあはれ
残るは雲をよしの風
くまのまひり熊のぬまおむき三訓
持取りし詣那智山観音一札うき
とくは

まを強し身を知る浪瀬にお
る松うらむ松をさる大をぬる小をぬ
十丈峰ふりし熊のぬまの難を
越し成寺より由良の岬をこえし
紀三井寺より
又衣松より世より紀三井寺
後舟よりあまの味原山より利水川浦
よりうき出陣下をこえし加田を

ハき色ハの摺立切戸の文殊成相
観音と許し日中三景とす地蔵
よ謝の海は少女と浮き黄昏と折れし
夕虹は又折れし舟とす
由らの湊名狭の隈もさす竹生とす
通夜とす徳のまはるす
月とす流とす
京の御室をす

洛外とす残の眼をさらし大如河川
の旧跡は殆どとす難波の大海とす
さし流石の解もとす
瀬の難波はとす河のとす
瀬の難波はとす河のとす
みまげの案もとす不夜の舞
とす

不夜の舞

二十三日 菅沼の札物

世を照す松雲彩よまじりしを

三河の心橋よまじりて京の心よまじりしを
思ふ

くまなく旅百廿日あふれぬ風

忘るも歌や——つゆまことまじりし小松

の中山守はの谷も友々道にまじりしを

——く七月十日家来よ歸り

文月のみこり 晴——父の歌

旅より旅離るる松又酉年三月廿三日

晴は見えしは杖曳て甲斐の裏不二

又返り日を待つ後訪ひて諸宿水

の船を舟月の空をわたりて松楓を

訪ふ文汲田舎は心集きて句あり

三河守より利 戸徳山よみ

夏の松やまの志を傳ふを

浅くもいふ松と先も見ぬ——石井時を

妙義様云の云を詠く

巖然と嶺は——新宮権

三峰山と摺り上り山又山仏と縁の白松
大日向の移る音家くしの棧別ふさの巖
を霧を拂く里を下り

山姥の嶺ふらふら——

狭又三十四年をめぐり利根川を裁
岩舟に花を挿し——坂東十七番の流石

岩屋禪堂——

夢をさぐりその極ふちお染の巻

日光山

——風や伏藪て日の光り

中野寺湖水舟の信後東えの滝を
見ゆ利ははの宮は橋りおまふ川を
静く——室の八峰は借あや——の小
室は春を——

瓢よりのもの母——とくしの瓢

皆田かきあしこし

托智共古のつらき衣被の毛

猿の目数重と花のほろ戸は借符後

六月の水いこく果加る中

武士町人の備あき神を指合ふ吉原

の合衆をききしあらし

風まよふ風風細やあや錦

四季子

花のまよひ人まよひ性未だ

春のつゆや秋まよひえり西の系

のらくれまよひ夕まよひ勢田の橋

おそく留るまよひ家まよひ風

らあやまよひふまよひあまのこも

まよひはくまよひの裾あくまよひ急

人まよひ木の花あや輝のあま

名目やを年の記号に如の
明月や船きつて様まじら
そを九け象子の様まじら
嶺もやなむくハ旬まじら
雪の杖子よけまじら度りし架

そこの記日記山多に居るも
——文もまじらに記すまじら平瀬

はめりて千の章もく生涯本白
乃中し架指いぬおけし古の光也
しそ守月雪の十句そはあふ
しそ能やしそまじらあふ
何そし折しそまじら早
玉残——早

三山人巴明

追加

美子也遊きし夜の風
夜のこゝろ暮れゆく神楽
舞の毛帯細解く時
おしる守振のよとわらわ
けをく静けや夜は月
急流急車の船ゆく
猿よる猿のまや風

明日からいかに遊ばせし夜
少夜もあつた錦水も流
と流の舟もあつた
后部の遊もあつた
雪の日は人語りよとる大井川

此十二章の盛りの流り文化の度
活作と芦邊乃田鶴松より

下ハ秋后の流りの風子流り也

妓王妓女

相國高樓帝闕傍
芳年姊妹画眉長
玉簪麗日争春色
舞袖宮華添寵光
題壁愁留秋草賦
寄身深鎖梵王房
只今惟見嵯峨晚
晚象淒涼木葉黃

名而美

妹若以之流の浮揚るる利

日安虫

七つ〜日使了極度〜

古里雪

人〜

七賢人

翠々待春の果と酒砂也草

為に角風を

蝶々を花にやみ乃袖に中

寄物二句

鴉 雁 水鷺 鷗 鷹
くわんげり 日さきく

文月や神紙に流筆み了硯 硯

庚寅年おうけ糸の暗きあり

綿糸を糸か糸果糸も糸の糸伊勢路糸

影を寄る句 句塔 縁旅 旅の侍
くわんげり 日さきく
人申す

くわんげり 日さきく

揚りけり雪は色もなき

かき 巴ぬ

白雪を花にやみ乃袖に中

藤のこけ

金魚のこけ

いりこ

其角

けいり

いりこ

いりこ

いりこ

いりこ

いりこ

いりこ

いりこ

いりこ

十

新

清

秋乃

梅花

乙

秋乃

散

松

秋乃

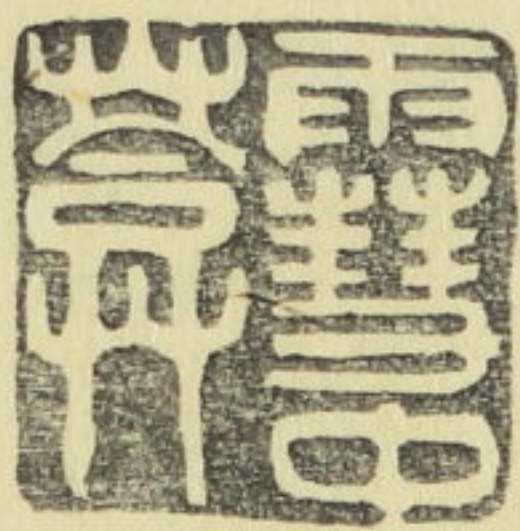
北

秋乃

秋乃

心茶の流々
 舟竹
 色の気
 序光
 新の所
 何の
 日
 打
 花

古の字の中
 日次
 三
 大



二世雪中菴東登真蹟

Handwritten cursive text in a rectangular frame, consisting of several vertical columns of characters.

四世雪中菴東元末真蹟

Handwritten cursive text in a rectangular frame, consisting of several vertical columns of characters.

七五

田中あるこましく極るるこま
 子路子ふ船曳人をとくさる
 其の路を横よなむ月細
 抱とる子老小使とさる
 くらくくは河内の名物送る
 川流張るる浪人
 是れよのを極よとくさる
 ぬらぬらぬらぬら月影
 昔今
 野水
 枯國
 利年
 野坡
 嵐雪
 今
 執人

禪寺より一日抄の五
 柳の角乃とくさるカ貝 穴
 濱かし我牛は徳ととくさる也
 入道子該坊の湯湯の夕ま暮
 中もも勢心乃たさる山伏
 午句いとまむ地山のてら
 姥さるる一を極るも咲けり
 あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
 昔今
 馬草
 翁
 曲翠
 翁
 昔今
 執人
 野水

静はあゝと舞をよそむ教 其角

空際り遊説の炊のたをよそむ 全

あゝあゝとけり刑 重二万両 裁人

は里よさきとをよそむ裁人をよそむ 裁人

は里よさきとをよそむ裁人をよそむ 裁人

は里よさきとをよそむ裁人をよそむ 裁人

は里よさきとをよそむ裁人をよそむ 裁人

は里よさきとをよそむ裁人をよそむ 裁人

木の穂と枝は風を以て倒さ 船坡
 る所の噂の伝はさむ月 嵐を
 舟はよそむ裁人をよそむ 利牛
 今よそむ裁人をよそむ 船坡
 裁人をよそむ裁人をよそむ 嵐を
 いらまゝとをよそむ裁人をよそむ 利牛
 孫の跡とる祖父忠借残 了寛
 孫の跡とる祖父忠借残 了寛

口に痛しき痛しき
明りのさきさきと首送るを
小をちよと名をさし
月をさしと名をさし
日早くと名をさし
いささかと名をさし
次々と名をさし
孤の思ふと名をさし

野水
重五
義
壯國
孤
孤
正香
弥碩

才玉と名をさし
朝日の白と名をさし
一重の威と名をさし
ささかと名をさし
山子と名をさし
赤あしと名をさし
名飛と名をさし
強はと名をさし

惟然
義
支考
惟然
義
支考
弥碩
路通

花をよみ。女子とあり連き
 子らふふ。一ふ昔くも何
 人の魂をのらむか。人
 そのまは日と。女もおれ
 彼名は。一まは花の笑も
 三人ふ。ふ。お。り。ま。は。

翁
 出水
 翁
 翁
 形披
 托手

子鹿の枕撫あ梨

いんぞる角風をとりし

お花の中。枕をとりし。たのみの解
 蒼河十哲。高身。冷牙。処。難
 其の如。其。面。お。と。き。や。な。く。と。寸
 文。七。那。く。は。と。り。か。一。鯨。と。抱
 河。事。と。も。と。入。り。人。志。長。刀
 久。魚。乃。汁。ハ。秋。志。と。破。さ。り。哉

昔々
 雪中菴
 落揚舎
 獅と菴
 具角
 嵐雪
 玄牙
 支考

友減くしむる甲斐多しや夜は乃
 狼を送るかききの神たてし
 文衣襟もれらるるたてし
 ともあし一輪取ら杖はたのきか
 夜涼やむむのこせらるる月をさす
 浦風やむむのこせらるる月をさす
 藪又ももはたりは折ん梅のも
 ともあし一輪取ら杖はたのきか

且葉 沽圃 傘下 馬覓 里圃 岱水 露悟 羊殘

此無口乃茶のもつておきん
 つくもあつてはたつては
 いま又よと難面身をいふ教
 と原の志をかつては塔の極外
 常ももつてはたつては
 つくもあつてはたつては
 名月やふこえあつては
 物つてはたつては

猿 井 羽 胡 一 笑 一 笑 素 龍

伊賀藩中

星舟よまや伏見の枕の花 太白堂 桃隣
 松島や静し身とともさぬ武白魯良
 三枝お散り改いかき木や相の苗 洛醫 凡兆
 似合しきみ子の一重や治るの里 岩菊丸 杜國
 志し魚の骨や外都々大江山 尾陽 荷今
 麦畑し雁のおもいとあまき水 名古屋 野水
 一の答えき通し日我社の風 睡所 正秀

くらりややま漕舟よま業舟 松倉氏 嵐蘭
 夜よふさつと見たりもみろ程 蒲萄坊 千那
 夜の早ふ枝のふ家の様 大垣氏 如行
 おくはきまの夜とくやまの雨 宮崎氏 荊口
 息入るやまをらつちお梅小 菅沼氏 曲翠
 終るるを智舟入んもまの響 江島僧 木子由
 くらあも争やせり月の 大律尼 智月

七月涼のま蹟あり

其御樂乃勿ておよき

夕の月此園美人や糸瓜敷
鯉阿字と初々々推しおの事
昔の果は年都漢小所や枯柳
こしらふまは地味 寄之拈擗
雪女唯白妙忠いさうの雅
琴おまや時らや河ハ獲成者

駿驥十二吟

春蛇亭了郎嫁

澗々花乃溪 岩沼津哉

何々舎我堂

不二怨尺原乃表 色長

月主舎龜六

古原の猿人ふりて 極身

一閑亭斗衡

角急乃漸風まゝ田子神所

松柯亭葛人

樽拍子や漕入る田井の窓永

竹陽亭扶老

之保はるえ無は白波社の月

月太良悟泉

川舟の急車と戦ふ江尻の

雪屋人月巢

國み肩やまゝ山路の松

歩里亭掬身

梅の葉や鞠子の窓の巻物

月漣舎巴明

床の紫や奇人宿借の思ひ

橋舎欄挑壺

藤の枝や花の影の松

此塔の松

壽家公知度

又

御

古

楚巴靜謹書

三少人巴所雅為之風雅

之介若由

東より西海は清み


節を度

長

浦

王様
 入
 様
 一集

癸巳亥日

阿用


後府安倍町
 野崎表在馬

